
誤字

三代渡吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誤字

【ZZード】

N2473E

【作者名】

三代渡吉

【あらすじ】

世の中には、やつちゅういけない誤字がある。

(前書き)

ずっと、作者紹介で灯宮義流を「ヒヤミコシル」と誤字ついていた作者の羞恥心から生まれた短編。作者の名前は「ヒミヤコシル」、「ヒミヤ」です。

「うちのカラオケには客がこない。なんでだろ?」

店はいつも綺麗だし、一つ一つの部屋も狭苦しくないようになつに余裕を持たせている。

食事にだつて自信がある。なんてつたつて、元帝国ホテルの授業員に作らせているんだし、グルメ雑誌にだつて何回も載つたくらい美味しい。

ドリンクバーつきで破格の値段だし、一番の要所であるカラオケの曲数は、日本でも一・二を争うだけのものがある。

安い、美味しい、歌いたい放題、居心地も良い。なのに、どうしてここまで客があんまりこないのか。

来る客来る客、青い顔してやつてくるし。どうこうことだ?

「あ、いらっしゃいませー」

「……」

また顔の青い客がやつてきた。くそ、どうしていつも縁起の悪い奴等ばっかりくるんだ。

「あの、すいません」

「なんでしょう」

「カンオケつてこちうで直しこのですよね?」

「へ?」

俺は慌てて外に出て看板を見てみた。そして驚いた。あらう」とか、大々的に外に出していた看板が『カンオケ』に誤植されてるのだ。

くそ、この看板作った奴は誰だ。俺だ、チクショー、そんな奴死んじまえ!

というわけで俺は、さつきやつてきた青い顔した自殺志望者である客と一緒に、一番のスイートルームで心中した。

俺はころし屋だ。

今までアメリカの重役から、とある国の首相まで、ありとあらゆる人間を撃ち殺してきた、殺しのプロだ。

みんなはこの昔、俺のことをフクロウと呼んだ。暗闇の中で正確に敵を仕留める姿から、その名を付けられたんだろう。全く、センスがあるんだないんだかわからねえ。

そしてこの度俺は、久々に故郷たる日本に帰つてきて、またころし屋を営むことになった。

俺はプロだ、警察なんて怖くない。だからもう堂々と「ころし屋」の看板を出している。たとえ警察が踏み込んできても、俺は裏じや有名だから、どこにいたって客はくるはずだ。

と、調子に乗っていたのだが……ここ一年、まったく客が来なくなつた。ついでに警察もこなくなつた。

どういうことだ？ 俺は今まで殺し屋としての地位をここまで築いてきたはずなのに、一人もこなくなるなんておかしい。

まさか、誰かが俺の評判を貶めたのか？ や、それはないだろう。十年以上積み重ねてきたものが、どこぞのボンクラの匙加減で変わらんて馬鹿げている。

では、どういうことなのか？ 俺は悩みに悩んでいた。

そんなある日、久しぶりに武器のメンテナンスがしたくて、俺は馴染みの武器商を店に呼んだ。商人は、ニコニコしながら俺の武器を見てくれたが、どこか複雑な顔も俺に向いている。

どういうことだと聞いてみると、商人は驚いた声で答えた。

「だつて旦那。ころがし屋に転職したんでしょう？」

「なぬ？」

俺と驚いて外の看板を見てみた。本當だ、『ころがし屋』になつてゐる。どういうことだ？ 俺は開店当初、ちょっと可愛氣を見せるためにひらがなで『ころし』と書いたことは覚えていいる。

だが、いくら俺でも『が』をふざけてつけるなんてことはあり得ない。というか誰がつけるかそんなもの。一体誰がこんなことをしたのか。

「同業者か？ 同業者がやりやがったのか？ 畜生、誰がやったんだ、即効で撃ち殺してやる。

「ようやく気づいたのね」

「なぬ？」

「そう俺に言つたのは、俺の愛する妻だつた。まさか、お前が犯人だつたなんて。

「あなたが悪いことから足を洗つてくれないから、私が『が』つて付け加えたのよ」

「お前、おかげで俺は一年間一銭も稼げなかつたんだぞ？ わかつてるのか？」

「悪いお金なんてもういらないわ！」

「その金で食つてきたお前が何言つてんだ！」

「もうたくさんなの。だからあなたは、転職して」

「何にだ、まさか、転がし屋になれつてか？」

俺は妻を皮肉つた。

「そりよ」

俺はずつこけた。

「結構転がるのって楽しいよ。ほら、こいつして」

と、妻は地面に寝転がると、口口口口と転がり始めた。目を疑つた。東京大学を出た妻が、コンクリートで舗装された臭い道を、口口口口と転がつているではないか。

妻はイカレちまつたのか？ と俺が頭を抱えていると、妻が俺の脚を引っ張つて、地面に引き倒した。あまりの痛さに、俺は地面を転がつて、のた打ち回つた。

「ほら、結構いけない？」

「なぬ？」

俺は、今度は意識して転がつてみた。

「……」

「どう？」

「お前なあつ！……結構いいな！」

何気に転がるのって楽しかった。というか、かなり気持ちよい。幼い頃、水泳で25M泳げたときのような快感を思い出す。

「よし、やろう、転がし屋！」

「あなた、わかつてくれたのね！」

こうして俺達は転がし屋を始めた。とりあえず、まずは一人で口

口口口と転がることから始まった。

あまりにも楽しくてやめられなくなつてゐるうちに、俺達は二人揃つて東京湾まで転がつて、そのまま海面深くまで転がっていくことになつた。

そして今、俺達は雲の上を転がつている。

(後書き)

僕も始めようかな、転がし屋。子どもは意外と喜ぶと思つ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2473e/>

誤字

2010年12月30日18時03分発行